

奈良・旧大乘院庭園
きゆうだいじょういんていえん

1 所在地 奈良市高畑町

2 調査期間 二〇〇四年（平16）七月～一〇月

3 発掘機関 奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 代表 岡村道雄

5 遺跡の種類 庭園跡

6 遺跡の年代 古代～近代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は平城京跡左京四条七坊の東端部、興福寺大乘院にあたる。
（財）日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乘院庭園保存修理事業」の一環として一九九五年度以降継続して調査を行なっており、過去にも木簡が出土している（本誌第二二・二四・二六号）。



（奈良）

今回の調査地は現存する東大池の西側と西南隅で、調査面積は計約六八〇㎡。主な検出遺構は、西小池中

池SG八三三三、同南池SG七六五一などである。

木簡は、水槽SX八八三八から六点、埋甕遺構SX八七九一から一点、魚溜まりSX八八三五から二点、計二九点出土した。SX八八三八は漆喰製の方形水槽（一辺約〇・五m）を据えた遺構で、飛鳥小学校関係の遺物が多数出土した。SX八七九一は二基の甕を南北に配した埋甕遺構。これらは、西小池廃絶後の遺構である。SX八八三五は、SG八三三三北部で検出した。南北約四・五m東西約三mの楕円形を呈し、深さ約〇・三m。杭と竹のしがらみによる護岸を伴う。池の清掃時などの魚の溜まり場とみられる。紹介する将棋の駒のほか、ばい独楽（べいごまの前身）・鉛面子などの遊具、鉛筆・消しゴム・算盤玉・石盤の枠木などの文房具や服飾・裁縫関係遺物などが出土した。

木簡はいずれも近代のものである。このほかの文字資料として、鉛筆に「小野」と刻書で記名したもの、墨書土器、墨書煉瓦、刻印を有する煉瓦などが出土している。

8 木簡の釈文・内容

水槽SX八八三八

(1) ．○□木□□
．○□□□□

122×28×5 011

- (2) 「。稲」
173×57×6 011
- (3) 「按田」
(140)×31×6 019
- (4) 「藤木」(刻書)
43×29×9 011
- (5) 「ウメキ氏」(刻書)
(124)×10×10 019
- 埋甕遺構S×八七九一
- (6) 「奈良県大」(和国添下郡カ)
「中清水」久須
「小学校第」
「鶴」
251×(92)×2 081
- 魚溜まりS×八八三五
- (7) 「飛車」
「将カ」
28×25×9 061
- (8) 「角行」
「中将」
26×23×6 061
- (9) 「角行」
29×25×4 061
- (10) 「少将」
25×20×8 061
- (11) 「大佐」
23×20×3 061
- (12) 「金将」
26×24×2 061
- (13) 「金将カ」
26×24×4 061
- (14) 「金将」
26×(23)×5 061
- (15) 「銀将」
25×(19)×3 061
- (16) 「少佐」
25×(22)×4 061

(17)	・ □ ₁ □ ₂	(22) × 20 × 5 061
	・ 少 ₁ □ ₂ [佐力]	
(18)	[少佐力] □ ₁ □ ₂	26 × (14) × 4 061
(19)	・ □ ₁ □ ₂	
	・ □ ₁ □ ₂ [佐力]	25 × (13) × 4 061
(20)	・ □ ₁ □ ₂	
	・ 大 ₁ □ ₂ [尉力]	24 × 20 × 5 061
(21)	・ 桂馬	
	・ 中尉	26 × (20) × 2 061
(22)	・ □ ₁ □ ₂	
	・ 中尉	23 × 19 × 3 061
(23)	[香車力] □ ₁ □ ₂	23 × 20 × 4 061
(24)	・ □ ₁ □ ₂	
	・ 中力	(10) × (14) × 2 061

(1)～(3)は札状の木簡。(4)(5)は竹片に刻書したもの。(6)は看板状のもの。(7)以下は将棋の駒。文字は墨書ではない可能性が高い。上端部がしっかりとした圭頭のもの、やや崩れたものがある。多くは片面を剥ぎ取るように削り、行軍(軍人)将棋の駒に二次的に加工する。削った面はいずれも未調整。削り方は、駒の下部左右どちらか一端に本来の面を残し、その対角線方向に向かって削り取るものと、全体を均一に削り取るものの二種に大別できる。行軍将棋の文字は、墨書のものもあるが、現状で橙色を呈するものもある。何らかの塗料の色か、鉄分が付着したためかは不明。行軍将棋は、日清・日露戦争期に詰め将棋から発展したものとされ、年代の上限を決める手がかりとなる。なお、釈文は原則として行軍将棋に二次的に加工する前の当初の駒を基準にして表記した。

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇五』(二〇〇五年)

(馬場 基)